

# 中村 壱太郎

僕の芸を勇気づけてくれる  
ご縁と交流を大切にしたい

昨年、30歳を迎えた中村壱太郎さんは、コロナ禍で全舞台が休演となった際に、いち早くオンライン配信で「ART歌舞伎」を表現した。ジャンルを超えた才能が集結して生まれたこの作品は大きな話題を呼び、ロシアでオンライン上映をされたり、映画館向けの音響と英語字幕つき、インターナショナル仕様にして映画館でも上映されたりするほどのコンテンツとなった。将来への可能性を秘めたこの作品は、どのようにして生まれたのだろうか。

「舞台に立つという当たり前のことができなくなったときに何かできないかと考え、今までにない映像の表現がしたいという思いからたどり着いたのが『ART歌舞伎』でした。このコンセプトは、歌舞伎の根底にある『傾く』という精神を現代風に表現するということ。ファッションやデザインを手がけている方々のモード感覚には、単にキレイという言葉では言い表せない、歌舞伎流に言えば、まさに『傾いている』ものを感じました。そこで湘南乃風の若旦那さんにご紹介いただいたアーティストの方と話し合っってモードを取り

入れたビジュアルを作り、そこから物語を深く掘り下げて創っていきました。その感覚が面白かったです」

この創作が実現したのは、まさに壱太郎さんの交友関係の広さや企画力、実践力によるもの。もちろん、その才能は古典作品を上演する際にも生かされている。直近の京都南座の「三月花形歌舞伎」では4人の若手俳優でアイデアを出し合った



なかむら かずたろう|1990年、東京生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業。父は四代目 中村鴈治郎。人間国宝の四代目 坂田藤十郎の孫。屋号・成駒家。95年、大阪・中座で初舞台。2007年、史上最年少の16歳で大曲『鏡獅子』を踊る。14年、日本舞踊吾妻流七代目家元・吾妻徳陽を襲名。女方を中心に舞台に精進しつつ、演劇、映画、テレビなど活動の場を広げている。  
<http://kazutaronakamura.jp>

『義経千本桜』の公演が大盛況のうちに千種楽を迎えた。こうした成功を次のステップへと導くのは、役者の努力に加え、観客の支えも大きい。「歌舞伎は、引退のない職業です。僕の初舞台から観てくださったという方もいらっしやいますし、『ART歌舞伎』で僕のことを知ってくださった方もいらっしやるかもしれません。そうした出会いがきっかけで一

生観てくださるかもしれないですね。僕が挑戦していくこれからの役者人生を共に歩んでくださること、僕と共に体感していただけることは、とても素敵な関わりだと思えます。

僕の場合は上方歌舞伎の系譜なので、祖父や曾祖父をご覧になつていらっしゃるお客様から祖父に似てきたと言っていたことがあります。僕が観たことがない曾祖父や若い頃の祖父

のお芝居を生でご覧になった方の言葉は大きいですね。似ていることがいいということではありませんが、僕の芸が勇気づけられるんです。役を演じることやお客様との交流など、いろんなご縁を大切にしたいと思います。そのご縁はすべて次に繋がっていくといいですね」

直に受け取る言葉は、役者にとつて活力であり、学びでもあるのだ。



©KSR Corp.

右の2点：「ART歌舞伎 花のころ」より。壱太郎さんと新羅慎二さん(湘南乃風 若旦那)との異業種コラボレーションから生まれたオンライン配信作品。壱太郎さんが演出も手がける。出演は、歌舞伎界から尾上右近さん、日本舞踊家の花柳源九郎さん、藤間涼太郎さんらが名を連ねている。 <https://artkabuki.com>

左の2点：歌舞伎では女方を中心に活躍する壱太郎さんが、現代劇で男役を初めて演じる『夜は短し歩けよ乙女』。乃木坂46の久保史緒里が扮するヒロイン「黒髪の乙女」に恋する「先輩」という役どころ。東京と大阪で6月に公演予定。 <https://www.yoruhamijikashi.jp>